

「島よ」について その3 福永陽一郎と「島よ」、そして私

尾崎徹

伊藤海彦(1925-1995)と大中恩(1924-)のこの作品が48年前に出版された当時、療養中の福永陽一郎氏は演奏活動を禁じられ、病院のベッドの上で毎日この楽譜を眺め暮らしていたという。それまでも大中恩作品を数多く演奏してきた氏にとって、この曲がとりわけ優れた作品であり、演奏者として「一刻も早く音にしたいという衝動を抑えきれなかった」と述懐している。そして退院後、大中恩自作自演の録音を聴いて愕然とする。自画像は、往々にして第三者の描く肖像画より本人に似ていない…、この演奏も病院のベッドの上の頭の中で鳴っていた音楽とは程遠いものだった。氏にとって、音楽のありようが初めて音になったのは1972年、東京六大学混声合唱連盟演奏会の法政アカデミー個別ステージにおいてであった。その年度の定期演奏会や演奏旅行でも実演を重ね、京都エコーを中心としたメンバー（法政アカデミーからの参加者もいた）でセッション録音も行われ、名盤として語り継がれるLPレコードが残された。氏のこの曲への思いは法政アカデミーを率いて1975年の全日本合唱コンクール大学の部で混声合唱が史上初めて金賞を得るという快挙に繋がり、1977年までの三年連続金賞受賞を果たすことになる。

私が入団したその当時、「蔵王」と「水のいのち」そして「島よ」は名曲であり、私たち学生に必ず歌わせようと、氏は三年毎にやろうと決めていて、幸運にも在学3年目の1979年に「島よ」の再々演が実現した。「水のいのち」でもそうだったが、練習に先立ち、氏はさまざまな色を使って加筆した楽譜を私に手渡し「最初の練習までに全員書き写すように」と指示をされた。色分けされ、書き加えられた音楽用語が各ページに溢れていた。それは変更というよりも、音楽をより際立たせるための“隈取(くまどり)”とも言えるものであり、その色使いの通りに、そして一言一句を漏らさず書き写した楽譜は今でも私の宝物である。

細長い腕を使って風車のように大きな弧を描いて見せるかと思えば、時よ、止まれ、とでも言うかのように広げた両手のひらを見せて空間で制止させる—この間も音楽は確実に流れている—、その動作が作り出す大きな音楽のうねりに、わたしたちは幾度となく酔いしれた。指揮を終えるとその長い背骨をガクンと曲げて一瞬疲労感を見せるも、練習後には一年だろうが上級生だろうが分けへだてなく談笑。私たちはさらに魅了され、尊敬の念を強くしたのだった。

大きな手のひらでイガクリ頭を撫でる仕草や、組んだ長く細い足が二重に絡んでいたことさえも全てが私の脳裏に焼き付いて離れない、「島よ」の音楽とともに。